

障害者に住みやすいまちを どのようにつくるか

講師 三田 優子氏

2019年12月7日（土）

社会福祉法人京都視覚障害者支援センター
障害者支援施設「洛西寮」ホール

主催：NPO法人 洛西福祉ネットワーク

講演会

NPO法人洛西福祉ネットワークは「高齢者・障害者に住みやすいまちづくり」を活動目標に掲げています。その一環として、2019年度障害者週間（12月3日～9日）に合わせて、12月7日（土）に講演会を開催しました。その概要を報告します。

「障害者が住みやすいまちをどのようにつくるか」

講師 三田 優子氏

大阪府立大学地域保健学域准教授
日本女子大学、東京大学大学院を修了後、愛知県発達障害研究所、花園大学を経て現職。専門は障害者福祉、精神保険学。社会活動として、大阪府社会福祉審議会委員、茨木市障害者地域自立支援協議会会長など。

「障害者に」と「障害者が」と「障害者も」

いただいたタイトルが「障害者に」だったんですね。「障害者が」でも「障害者も」でも、なんでも私の中ではいいんですが、とにかく障害があってもなくても住みたいという人が機械よく住めるような町に私も住みたいと思っております。

して、そんな話をさせていただいたらいいかなと思っています。

私自身は、学生時代に無理やり行かされた精神病院での実習がすべてのスタート。多分精神の病気になる可能性は私もあるので、そうなった時にもうちよつとましなところが増えたらいいなあ、と。

その後大学院に行きながら、家族会の方と精神障害者のグループホームを地域で立ち上げて、そこで5年間スタッフとして働きました。初めての就職先は愛知県の発達障害研究所の職員です。そこは知的障害あるいは重症心身障害をお持ちの方が、750人山の上で暮らす、入所施設の一角にあったんですね。その研究員を約10年ほど。その当時世の中で発達障害と

いうのはまだそんなに言われてなかった頃だったと思います。

(1) 障害者支援の前に、自分自身を振り返ってみよう

今日は障害者のことを勉強しに、障害者をどうやって支援しようかという立場で、ここに参加しましたって方がほとんどかもしれないんですけど、自分自身を振り返っていただるところから始めようかな、と思っております。

もし、「私は障害者ではない」と言えるとしたら、それはどうしてでしょうか？ 障害者手帳を持っていないから？

それとは逆に、心も体も100%何の問題もなく健康だという方はいらっしゃるでしょうか。学生が入学してきて初めの授業でこれを訊くと、まあ100人20



2019年度障害者週間ポスター（内務省）



0人いると、4人5人くらい自信満々に垂直に手を挙げるんですね。「私は健康そのものです」って。「私は支援する人になるんだ」と。私からすると、その5人が要注意学生になります。

自分は全く問題がない、という風になんの根拠かわからないけど思っているということは、川の流れている向こうの方に支援が必要ながいて、川のこっち側に私がいるんだってというような感覚。これだと実態として違うんじゃないかな、と思います。「障害者」っ

ていう方にお会いすると、この人は何らかの支援が必要で、自分ではできないところがあるんだろうなあっていう風に思っ。

でも私にもできないことがあるし、実は私も誰かの支援が必要な状況ではないかな、と思っんです。

(3) 別に知らなくても全然生きていけるんですけれど

日本人の13人に1人がなんらかの障害があるという数字。自分はお医者さんにもかかってるし、しんどいところはあるけど、障害者の手帳はとりません、と言ってる方。なかなか数字としてはカバーできない発達障害の方、難病の方なども含めると少なく見積もっても10人に1人になります。

「まあこういう子を産んだお母さんは、一生お子さんのために捧げなきゃね」と言う医者。「あなた(親)のせいでしょ」みたいなことを言う医療機関の方も、実はいるんです。古い障害観に染まっている人は世の中にはたくさんいらっしゃる。

産んだ人の責任、家族が責任を持って養護するべきだ、っていうのがまだ社会の中にもあって、皆

さんが思っている以上に障害のあるお子さんやご家族が追い込まれるのは確かです。

だからなんで「助けて」って言わないの?じゃなくて、「助けて」って言えないようなムードが身近にあるんだ、という風に考えていただけたらなあと思っってます。どこかで自分を責めながら、

家族も自分の人生の夢やなんかを捨てながら。そんなのって障害者本人だっていやですよ。お母さんが僕のために何もかも諦めたんだなんて。そういうおうちが少しでもなくなっていくといいなあって、私はいつも思っっています。

一生捧げて、親の夢なんかはもうどこかにしまっって、障害のある子の責任を取れといううちに、もし私やみなさんが暮しているとしたら...どう感じられますか?

(3) 結構売れているラーメン屋の看板娘!

札幌市内にある、かなり重い自閉症の方たちが50人暮していた入所施設。50人中多分3分2くらいは言葉がありません。それが今では50人皆さん地域に出て普通に暮らしてます。

この施設の中に30年もいた女性がいました。彼女ね、字が読めないし書けないし、「いらっしやいませ」も「ありがとう」も言われないわけ。その彼女が一般のラーメン屋で働いていることを知って、どうやって働いてるんだろっ、どうして彼女を雇ったんだろっって気になって行っただんです。

その大将が、すごい変わった頑固親父みたいな職人。彼女が注文聞いたりするのが楽なように、メニュー全部を食券で買える仕組みとかにして、彼女でも働けるような形になってました。で、「いらっしやいませ」は一個もないです。

席に座ると、常連客のサラリーマンが「ラーメンももちろん美味しいけど、彼女のファンです」って言った。その彼女は裏で洗いや物の仕事でもしていると私勝手に思ってたわけですよ。そしたらもう接客の最前線にいたんですよ。

そのファンが言うには、前はおばちゃんが2人でやってて、いつも間違えて、味噌が醤油になったりしてたのが、彼女になってからもう食券なんて見てもいないのに

ばつと見ただけで、12人のカウンターのメニューを全部覚えるんですって。一度も間違えたことがない。で、「すごい」と。これ自閉症の得意な分野ですよ、きつと。大将からは「愛想はあるけど、間違えたり欠勤したり、お客さんに失礼なことをする人より彼女の方100倍いい。絶対に辞めないでもらいたい」と。

地域の人のほうが、その人をその人として見るのは長けてるんじゃないかって思うことがあります。「できない」ことがこれとこれっていうのは、支援をしてる側はわかっている。だけど、「できる」ことが施設の中にいたから、それがわからなかっただけ。ここから出た50人の人はみんなそんな形で活躍してるんですって。

これは社会の側が、障害のある人に環境や条件をある程度整える。障害者本人というよりは、周りが社会が変わることで、その障害も変わるんだと、というような考え方だと思います。

(4) 「知らない」「つづいていこうが、バリアを生んでいく」

皆さんからしたら「えっそうな

の？」っていうことが実はあります。例えば、なにか皆さんおうちで倒れたりしたら救急車を呼びますよね。電話対応ですよ。救急車、電話対応なんですよ。電話ができない人は救急車呼べないんです。誰かにやってももらわないと。それから今度救急車で運ばれてきて、「障害があるんです」って言うのと、降りてくださいますか、いっつかかっている病院に行ってくださいって言われる方も結構いて。

それから、交番に行きます。行くのだいたいメモがあって、緊急の方はここに電話してくださいって、張り紙があつて、電話があるんですよ。そうすると、その張り紙を見ることができない視覚障害者は、「すいませーんー」ってずっと言うわけ。で、張り紙は見えないけど、聴覚障害の方は電話ができないわけ。そうすると、もうそこで「ああ交番は私たちにとって役に立たないんだ」って思ってる人が、もう今までもずっといるわけ。ご存知ですか？皆さんこのこと。

あるいは、幻聴のある精神障害者がぶつぶつ、ぶつぶつ言ってる。この人はそんな事言ったら、

私たちの声なんか聞こえないだろうって。幻聴と話をして忙しいから、こつちの人と対話できないけど、「あんな人間はね、この世にいなきやいのにつ」て言われたら、ぶつぶつ言いながら傷ついてるって言っていました。聞こえてますって。

知らないっていうことが、バリアを生んでいる。じゃあ、おんなじ体験しなきゃ駄目かって言ったら、そんなことは全然ないんですけど。そういう人が近所にもいるんだってことを知ってるだけで、ずいぶん違う。そして、どんな風に声をかけたり、どんな風に付き合っていくかはその人に聞くしかないんですよ。

同じ知的障害者の方が5人いたら、5人が皆おんなじ暮らししてるなんてありえないじゃないですか。この地域に住んでる60代の男の人はこんな風に暮してますよね、って言われたら違つて言うでしょう？

(5) グループホーム入居者の理想の職員さん

グループホームに入ってる人何千人分くらいの調査をしたことが

あります。その時に知的障害のある方に、どんなふうな支援者がいいですかって聞きました。答えはすごくシンプルで、「私のことをちゃんと大人として見てくれる人」っていうのが、圧倒的な1位でした。この答えてくれた中には10代の方から70代80代までいるんです。いつも近くにいる職員は23代30代なのに、「なんとかちゃん」とかね、あるいはタメ口でね、すぐくなんか子供扱いするのがとても嫌だと思ってるんだけど、「はい」とか言っちゃうんだって。で、二番目は「わかりやすく話してくれる人」、三番目は「馬鹿にしない人」です。

それから、精神障害者の方は、もうこれも圧倒的ダントツ1位です。「普通に人として接してくれる」。これがまたできないんだわ。人の色んな情報を聞くと、例えばね、こんな病気がしいよって言うたら、もう病気が全面に来ちゃつて、今までの付き合いはなんだったのみたいなあなた。あの人うつで通院してるらしいよって言うたら、えー目の前に行つて余計な事言わないで口チャックしよ、とか。

で、「一番目は「口うるさくない人」、三番目に「まず病人として扱わない人」。

でも、そういう人に付き合ってる障害のある方はえらい、と。

支援者かどうかわかりなくともいいです。皆さんがちょっと大変な時に、家に来て誰かが助けてくれたとします。その人のことをいきなり子供扱いして、「そうかわつなのねえ」とか言ったりですよ、それからわかりやすく言ってるかわからないのに「わかったよねえ？」なんて言う人とか。今までの自分と全く違うような対応して、口うるさく散々騒いで帰る人とかいいですか？

これ、障害者だけじゃなくて、私にとってもきついかかわつたらう。多分どんな風にかかわつたらいいかは、自分がこんな風に関わられたら嫌だな、っていうのをやらなければいいんじゃないかな、と私は思います。そんなに難しい事はないです。

(6) 障害のある方も共に生きるま

ちづくり

皆さんに、障害のある方も共に活きるまちづくりを、やっぱり念

頭において動いていただきたい。じゃあどうやれば、知的障害や精神障害の方、あるいは重度の身体障害があつて、全く言葉が無い方なんかと、どうやって付き合ったらいいんだろう、と思われるんじゃないかと思っています。

いろんな本には、障害の特性はこうだつて書かれてるかもしれないけど、そんなこと全部わかつて付き合うなんていないじゃないですか。胃がんのことが全部わかつたら、胃がんの人と付き合うんでしょか。あるいは、認知症のことが全部わかつたら、認知症の方と付き合えるんでしょか。そんなことなくって、人が人と付き合う時にいちばん大事なものは、「社会性」があれば十分ですつて。これ精神障害の当事者の言つたんですけど。社会性って何つて言うとか、普通に人として、「おはようございます」とか、久しぶりに会つたら「おー」くらいが言えたりとかね。間違つたら「ごめんなさい」とか言うとか、そういう最低限のマナー。

この人は病気や障害のことはわかつてなくても、ちゃんと私に普

通に接して、「こんにちは」と言い、「ありがとう」と言う。そういうことができる人だつて言つたらね、その人がとっても大事な人なんだつて。もし皆さんが、普通に人と人がつながる、最低限のマナー、社会人としてのマナーである社会性をお持ちなのであれば、私はどんな障害のある方ともおつきあいできると太鼓判を押します。

その次に市民性。これは同じ市民として、障害や病気はあるけど、たまには楽しいことがなきゃね、みたいな。そんな市民性を持つてる人に囲まれていたら、私の暮らしは変わるだろうな、という風に言われました。逆に言えば、障害がないと言われている人たちも、生活を楽しくてますかつて問われているわけです。

障害者だけが楽しむつていうのも、ちょっと変でしょうつて。一緒に楽しみたい時に、市民の方がひいひい言いながら生きづらさを抱えているんだつたら、それはみんなで分かち合いましようという風に、障害者側から言われているかなあ、と私は思っています。みんな

な同じ市民として、誰かを助け、助けられる地域へということ。

一番初めに言つたように、川の向こうとこつちに障害者とそうじゃない人がいるつていう捉え方がもう違つてくる。だとしたら、私も生きやすいまちだつたら障害者も生きやすい。障害のあるなしに関係なく、誰もが住みやすいまちを皆で考えていくのが、一番早道だということになるわけです。

ありがとうございました。

発行 2020年3月

NPO法人

洛西福祉ネットワーク

(編集協力 企業組合 Fuu空間計画)

〒610-1145

京都市西京区大原野西竹の里町1丁目19-4
竹の里センター内

電話 075(333)339 FAX 075(333)3399

rakusai1.net@gmail.com

<http://rakusai-fukusinet.life.coocan.jp/>